

福島県郡山市における接尾辞ラヘンの新用法 -場所 を示す名詞+ラヘンを中心に-

著者	佐藤 亜実
雑誌名	言語科学論集
巻	16
ページ	27-38
発行年	2012-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/55290

福島県郡山市における接尾辞ラヘンの新用法 －場所を示す名詞＋ラヘンを中心に－

佐 藤 亜 実

キーワード：福島県郡山市方言、接尾辞、ラヘン、世代差、新用法

要 旨

「駅ラヘン」「東北ラヘン」のように使用される接尾辞ラヘンの存在を指摘し、福島県郡山市での使用の状況とその用法について記述した。接尾辞ラヘンの基本形式である指示代名詞＋ラヘンの形式が世代を問わず使用されていること、若年層・少年層を中心に使用されている名詞＋ラヘンの形式が接尾辞ラヘンの新用法であると考えられること、さらに、場所を示す名詞＋ラヘンの2つの用法を指摘し、名詞＋ラヘンの示す範囲の捉え方によって使用率が異なることを示した。

1. はじめに

現代の共通語において、「そこラヘン」「どこラヘン」という表現はよく使用されていると思われる。例えば、机のあたりを指差しながら「荷物はそこラヘンに置いておいて」と言われれば、特にその表現に違和感を抱くこともなく、机の近くやその上に荷物を置くという行動を取る人が多いと予想される。しかし、これが「荷物は机ラヘンに置いておいて」という表現になるとどうであろうか。おそらく、文脈や「そこラヘン」との類似性から意味を汲み取ることができたとしても、「そこラヘン」を使用した表現よりも違和感を覚える人は多いのではないだろうか。使用する人となると、それよりもさらに少数であると考えられる。

一方で、福島県郡山市においては、近頃「机ラヘン」「学校ラヘン」のように一般の名詞が上接した形式が若い世代によって使用されている。上接する名詞の種類も多岐にわたり、場所を示す名詞や時間を示す名詞、人や事物を示す名詞など様々である。形式・意味ともに「そこラヘン」「どこラヘン」等の形式と関連性があることから、一般名詞＋ラヘン（以下、名詞＋ラヘンと表記）は場所を示す指示代名詞＋ラヘン（以下、指示代名詞＋ラヘンと表記）をもとに発生した新しい用法であると想像できる。

ことばの新しい用法を研究対象にすると、まず重要なのは、その用法の使用実態

や性質を捉えることである。すなわち、確実に使用がなされている地域や世代における現状を把握することが必要である。

そこで、今回はラヘンの新しい用法が多用されている福島県郡山市を調査地点として設定した。本稿では、福島県郡山市における名詞+ラヘンの用法、特に場所を示す名詞が上接した場合の特徴について記述していく。2節でラヘンの構成要素についてみた後、3節で調査概要を確認する。接尾辞ラヘンの用法として、4節では基本的な用法である指示代名詞+ラヘン、5節では新しく派生した名詞+ラヘンを取り上げ、その使用状況について述べることとする。

2. 接尾辞ラヘンの構成要素と性質

ラヘンという語形について考察する上で、まずは辞典類¹を調査した。ラヘンのみを取り上げた記述はどの辞典にも見当たらなかったが、2種の国語辞典、5種の類語辞典に指示代名詞+ラヘンの形式が記載されていた。指示代名詞+ラヘンの形式は、特に国語辞典においては「どこら」という見出し語の用例内での記述(「どこら辺」)しかみられなかったことから、ラヘンは《指示代名詞「どこ」+ラヘン》ではなく《指示代名詞「どこら」+ヘン》の構成をとるものと把握されてきたと思われる。しかし、新しい用法とみられる「駅ラヘン」「真ん中ラヘン」について考えてみると、名詞の後には必ずラヘンの形式が接続しており、ラやヘンのみが接続する用法はみられない。また、一般名詞にラが接続する形式は、上野(2001)、上野(2011)に「東京ラ」「お腹ラ」等の報告があるが、いずれも西日本、特に高知県にみられるものであり、福島県での報告はない。このことから、福島県郡山市においては、《名詞「駅ら」+ヘン》ではなく《名詞「駅」+ラヘン》という語の構成をもとに用法が拡大しているとみてよい。従って本稿では、上接語にかかわらず、ラヘンを1つの接尾辞として捉えることとする。

ところで、ラヘンはもともと接尾辞ラと名詞ヘンという2つの構成要素が複合してできた形式だと考えられる。接尾辞ラと名詞ヘンについては、『日本国語大辞典第二版』においてそれぞれ「事物をおおよそに指す」「漠然とある場所や位置、また、その場所に住んでいる人を示している語」との記述があった。これらの記述から、接尾辞ラと名詞ヘンには「ある場所やものを漠然と示す」という共通した性質があると捉えられる。従って、ラとヘンから構成されているラヘンにおいても、同様の性質が存在することがうかがえる。

ラヘン自体を取り上げた研究は管見の限り見当たらないが、これもラとヘンに

関する研究はいくつか存在する。接尾辞ラの研究は、複数接尾語として「～達」の意味を表すラに関するものが多いが、それ以外のラの研究としては阪倉(1966)、毛利(1977)、上野(2001)、上野(2011)がある。阪倉(1966)は、ラは「一つのものを代表的に呈示しながら、その背後や周辺に、これにまっはつて存在し、これによつて代表されるやうな事態を暗示的に表現しようとする、一種の臚化法的表現である」(p. 315)とし、「今日ら」を例に挙げて「今日あたり」という意味に近いと指摘した。その指摘は、毛利(1977)、上野(2001)、上野(2011)のような後年の研究にも受け継がれている。また、ヘンに関する研究としては、「あたり」の類似表現として指摘した森田(1989)、芳賀・佐々木・門倉(1996)、その用法について記述した木村(2000)がある。

上に挙げたラとヘンに関する研究のいずれにも共通するのは、『日本国語大辞典第二版』の記述と同様の「ある場所やものを漠然と示す」という性質である。以上のことを踏まえると、ラヘンの共通語的な意味としては「～(の)あたり」が適切であるように思われる。本稿では、ラヘンを「～(の)あたり」という意味を表す1単位の接尾辞として捉え、その新しい用法を記述していく。

3. 調査概要

接尾辞ラヘンの新しい用法の使用状況を確認するために、福島県郡山市で調査を行った。先述したように、新しいことばの使用実態や性質を捉えるためには、確実に使用がなされている地域や世代における現状を把握することが必要である。そこで、接尾辞ラヘンの多用が自然傍受法によって確認できた福島県郡山市を調査地点に設定した。また、福島県郡山市は筆者の出身地であり、多数のインフォーマントを集めることが可能であったということも理由の一つである。

調査時期は2010年10～11月、調査方法は、自記式のアンケートを用いた多人数調査である。接尾辞ラヘンの調査項目は筆者の内省と自然傍受法で得たデータをもとに19項目を設定した。ラヘンの上接語の違いによって使用率が変動するのではないかという想定のもと、指示代名詞が上接する場合・場所を示す名詞が上接する場合・時間を示す名詞が上接する場合について調査した。使用する/以前は使用した/聞くことはある/使用しないし聞いたこともない、の4つの選択肢から1つを選ぶ方式をとった。

なお、接尾辞ラヘンの新しい用法は福島県郡山市独自のものではなく、他地域の影響を受けた表現である可能性も否定できない。そのような外的要因も考える必要は

あるが、ことばの変化の変遷を考える上では、まずは内的要因を探ることが必要であると思われる。そのため、今回は福島県郡山市における接尾辞ラヘンの用法を記述することに重点を置き、福島県郡山市に居住しており、外住歴のないインフォーマントのデータを分析に使用することとした。また、分析に際しては、年齢別に「高年層」(60歳代以上)、「中年層」(30歳代～50歳代)、「若年層」(大学生/20歳代)、「少年層」(高校生)に分類した。調査人数の内訳は表1の通りである。

	男	女	合計
高年層	10	24	34
中年層	18	31	49
若年層	23	36	59
高校生	75	70	145
合計	126	161	287

表1 調査人数内訳

調査の結果、福島県郡山市においては、「そこラヘン」「どこラヘン」のような指示代名詞+ラヘンの形式のみならず、名詞+ラヘンの形式が若い世代を中心に使用されていることがわかった。名詞+ラヘンの新しい形式は、「東北ラヘン」「肩ラヘン」のように空間を示す用法や「明日ラヘン」「9時ラヘン」のように時間を示す用法にまで拡大している可能性を見出すことができた。本稿では、新しく生じた名詞+ラヘンの用法において最も原初的なものであると考えられる空間を示す用法に焦点を絞って記述し、その他の用法に関しては別稿に譲ることとする。

4. 指示代名詞+ラヘンの分析結果

まず、基本的な形式と考えられる指示代名詞+ラヘンの分析結果を提示する。項目は(1)、(2)のように設定した。いずれも、指示代名詞が表す場所を漠然と示すものである。

(1)太郎:この荷物どこに置けばいい?

次郎:あ、そこラヘンに置いといて。

(2)太郎:花子は今どこラヘンにいるんだろう。

次郎:多分帰り道じゃない?

指示代名詞+ラヘンの使用率を確認するため、「使用する」の回答を図1のようにグラフ化した。図1では、そこラヘン・どこラヘンともに高年層・中年層は50～70%の使

用率であるのに対し、若年層・少年層は90%の使用率である。従って、指示代名詞+ラヘンは、特に若年層・少年層を中心によく使用されている形式であることがわかる。

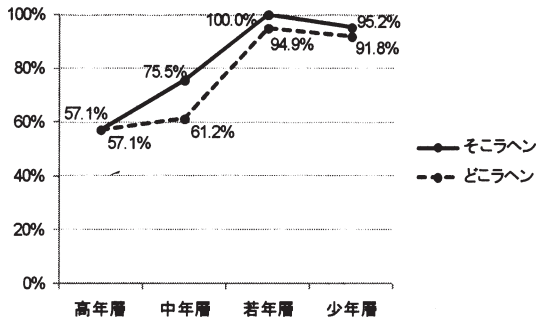


図1 指示代名詞+ラヘンの使用

高年層・中年層でも50%以上の使用率があるが、そのグラフは高年層から若い世代に向けて増加している。このことから、基本的な用法とみなした指示代名詞+ラヘンの使用にも世代差が指摘できる可能性もある²が、その点に関しては本稿では取り上げないこととする。

5. 場所を示す名詞+ラヘンの分析結果

5-1. 名詞の範囲の広狭と使用率の関連性

次に、指示代名詞ではなく名詞が上接する接尾辞ラヘンについてみていく。名詞の中でも、場所を示す名詞につき、その場所を漠然と示すラヘンの用例は、自然傍受法においてよく聞かれたものである。場所を示す名詞+ラヘンの用例として、今回は以下の(3)と(4)の用例を設定した。(3)は「東北あたり」、(4)は「ベニマル(店名の略称)あたり」の意味を有する。以下の図2に結果を示す。

(3) 太郎: 花子って出身どこだっけ?

次郎: たしか東北ラヘンじゃない?

(4) 太郎: 花子の家ってどこだっけ?

次郎: たしかベニマルラヘンじゃない?

図1と同様、図2も「使用する」という回答をグラフ化した。図2の結果を図1の結果と比較すると、高年層・中年層の使用率は平均して44%減少していることがわかる。一

方で、若年層・少年層においては、東北ラヘンでは60%以上、ベニマルラヘンでは80%以上の使用率がみられる。このことから、場所を示す名詞＋ラヘンの使用には世代差があることが分かる。また、接尾辞ラヘンの他の項目において、高年層・中年層における名詞＋ラヘンの使用率が25%を超えることはなかったという事実も併せて踏まえると、福島県郡山市においては、名詞＋ラヘンは新しく出現した形式であると考えられる。

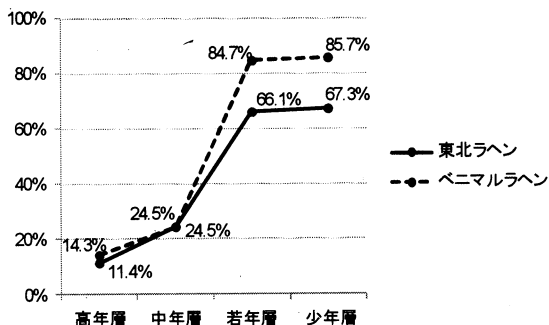


図2 場所を示す名詞＋ラヘンの使用

さらに、世代差のみならず項目によっても使用率の差が生じることが指摘できる。図2の若年層・少年層の結果に着目すると、若年層・少年層ともに東北ラヘンは60%台の使用率であるのに対し、ベニマルラヘンは80%台の使用率である。図2のように使用率に差が生じた要因として、名詞＋ラヘンの示す空間の広狭の違いが考えられる。「東北ラヘン」と「ベニマルラヘン」を比較すると、前者の方がより広域の空間を、後者の方がより狭域の空間を示しているといえる。これらの結果をもとに、以下のような仮説を立てることができる。

仮説Ⅰ：場所を示す名詞＋ラヘンの使用には、上接する名詞が示す空間的範囲の広狭が影響しており、狭い範囲を表す名詞が上接した形の方が使用されやすい。

5-2. 仮説Ⅰの再考

仮説Ⅰをさらに確認するために、(5)(6)の項目を設定した。(5)(6)ともに同じ「肩」という名詞が上接した形式であり、(3)の「東北」、(4)の「ベニマル」よりも狭い範囲を示している。また、同じ名詞を接続した形式でも、(5)では肩が痛いということを教えており、(6)では肩にトンボがとまっていることを教えている。どちらも「肩のあた

り」のように言い換えられるが、両者を比べると、「肩のあたり」が何となく痛いと述べている(5)よりも、「肩の一点にトンボがとまっている」ことを把握できている(6)の方がより狭い部分を提示しているといえる。つまり、同じ「肩」という名詞であっても、文脈によって示す範囲が異なるということである。[狭い範囲を表す名詞が上接した形の方が使用されやすい]という仮説が正しいとすれば、(4)の「ベニマルラヘン」よりも(5)(6)の使用率の方が高く、特に、(6)の「肩ラヘンにトンボがとまっている」用例の使用率が高くなると考えられる。(5)と(6)の“使用する”という回答をグラフ化したものが図3である。なお、比較のために、(4)の「ベニマルラヘン」の使用率のグラフも提示した。

(5)太郎:どうしたの?

次郎:なんだか肩ラヘンが痛い。

(6)(肩にトンボがとまっていることを教えるとき)あ、肩ラヘンにトンボがとまっているよ。

図3より、高年層・中年層の使用率は変わらず低いといえる。使用率の高い若年層・少年層の結果に着目すると、トンボがとまっていることを教える文の使用率は30～40%台であるのに対し、肩の痛みを知らせる文の使用率は60%台であった。両者とも「ベニマル」よりも狭域を示す名詞であるが、「ベニマルラヘン」よりも使用率が低いグラフとなっている。また、「肩ラヘン」を示す語であっても、若年層では30.5%、少年層では27.2%と、それぞれ30%前後の使用率の差がある。より狭域を示している、肩のある一点にとまったトンボの存在を教える文の使用率の方が、漠然とした肩の痛みを知らせる文の使用率よりも低いといえる。

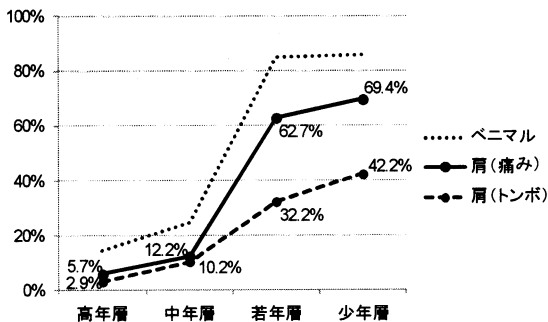


図3 範囲の広狭の比較

先に、[狭い範囲を表す名詞が上接した形の方が使用されやすい]という仮説を立てた。しかし、図3にあらわれた結果は、この仮説には当てはまらない。

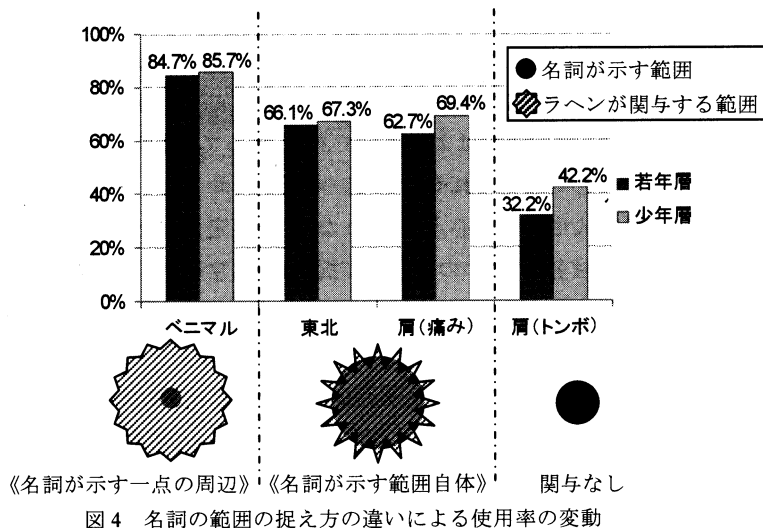
これまで、ラヘンに上接する名詞のみに着目し、その空間的範囲の広狭について考えてきた。ここでは、名詞および名詞+ラヘンが示す範囲に着目したい。例えば(4)は、「花子の家はどこか」という問いに答えるものである。この時の「ベニマルラヘンじゃない?」という回答は、「花子の家はベニマルのあたり(ベニマルの周辺)にあるのではないか」という意味を表しており、「ベニマルという範囲の内部にあるのではないか」という意味にはならない。「ベニマル」という名詞自体の範囲はあまり想定されておらず、単なる位置として捉えられているといえる。極端にいえば、1つの点として捉えられているとも表せる。そしてこの場合、ラヘンは名詞の周辺の範囲に関与し、「ベニマルの周辺」という意味を示しているといえる。すなわち、名詞が単なる位置を表す1つの点として捉えられる場合、ラヘンはその点の周辺を漠然と示していると考えられる。

対して、(3)(5)の文は、(4)とは示される範囲が異なる。(3)の場合、ラヘンを用いた「花子の家は東北ラヘンにあるのではないか」という表現は「東北という範囲の内部に住んでいる」という意味を示す。(5)も(3)と同様に「肩という範囲の内部が痛い」ということを表している。(4)とは異なり、(3)(5)では「肩」「東北」という名詞自体の範囲が想定されているといえる。言い換えると、名詞が一定の空間的広がりをもつ範囲と捉えられている。この場合、ラヘンは名詞の範囲自体を漠然と示していると考えられる。

以上に挙げた例とは一線を画するのが(6)である。(6)は「肩にトンボがとまっている」ことを教える文である。(6)には、肩のある一点に焦点をあて、「(肩のある一点の)周辺にトンボがとまっているよ」とする捉え方と、肩という名詞に範囲の空間的広がりをみとめ、「肩という範囲の内部にトンボがとまっているよ」とする捉え方の2通りの解釈がある。しかし、いずれにせよ「肩にトンボがとまっている」ことを把握した上で、そのことを本人に直接教えているという状況を考えると、トンボが肩のどこにとまっているかは確実に把握されているといえる。トンボの存在する場所が明確である場合、「～(の)あたり」という表現は使わず、「肩にトンボがとまっているよ」という表現を用いることが一般的であると考えられる。従って、(6)の文は、本来であれば成立しにくい文であるといえる。

これらの違いを踏まえ、図2・図3から若年層・少年層の使用率のみを取り出し、使用

率の高い順に並べたものが図4である。図4をみると、「ペニマルラヘンに住んでいる」のように名詞がある1点を指しており、接尾辞ラヘンがその周辺を示すものの使用率が最も高く、80%以上の使用率である。「東北ラヘンに住んでいる」「肩ラヘンが痛い」のように名詞が一定の空間的広がりをもっており、接尾辞ラヘンがその範囲自体を示すものの使用率はその次に高く、60%以上の使用率である。これらの結果から、場所を示す名詞+ラヘンの形式には、名詞をある1つの点と捉え、その周辺を漠然と示すラヘンの用法と、名詞を一定の空間的広がりをもつ範囲と捉え、その範囲自体を漠然と示すラヘンの用法があり、特に前者の用法がよく使用されていると指摘できる。



なお、トンボのいる位置が明確にわかっているため、本来ならば成立しない文とした「肩ラヘンにトンボがとまっている」の使用率は最も低いが、それでも30~40%台の使用率がみられた。これは、若い世代においてラヘンの用法が拡大していることのあらわれである可能性もあるが、調査文をみたインフォーマントが、トンボがとまっている位置が明確でないと判断し、「肩の周辺、あるいは肩という範囲のどこかにトンボがとまっている」という場面を想像した可能性もある。今回の調査結果のみではその点を明らかにすることは困難であるため、本稿で詳細を述べることはしない。

以上のことを踏まえ、これまでの仮説Ⅰを改め、仮説Ⅱを提示する。

仮説Ⅱ：場所を示す名詞+ラヘンの使用には、名詞の示す範囲の捉え方が影響しており、名詞を、ある一点と捉えるか、それとも一定の空間的広がりをもつ範囲と捉えるかによって使用率が変動する。名詞が一定の空間的広がりをもつ範囲と捉えられてラヘンが名詞自体を漠然と示す用法よりも、名詞がある一点と捉えられてラヘンがその周辺を漠然と示す用法の方が使用されやすい。

5-3. 仮説Ⅱの検証

本節では、他の用例から仮説Ⅱを確認する。以下の(7)～(9)は、接尾辞ラヘンに「真ん中」「上」「下」のような位置を示す相対名詞が上接した用例である。相対名詞は「東北」「ベニマル」等の名詞とは異なり、「机の上」「机の下」のような修飾部分が付かないと意味が明確にならず、その範囲はより曖昧である。従って、相対名詞は一定の空間的広がりをもつ範囲として捉えられやすいといえる。

ただし、例外的に「真ん中」は「中心点」のような、より限定された範囲を想像しやすいと思われるため、(7)は名詞が1つの点として捉えられ、ラヘンがその周辺を示す用法と考える。(8)は「下」という名詞が一定の範囲をもち、ラヘンが名詞の空間的範囲自体を漠然と示す用法とする。(9)も(8)と同様に捉えられるように思われるが、ペンの欠けている部分を目にし、欠損部分を確定した上で報告している文であることから、ラヘンを用いて「～(の)あたり」を示す表現はそぐわないと思われる。従って、「肩ラヘンにトンボがとまっている」の文と同様の性質をもつものとして考える。(7)～(9)の若年層・少年層における“使用する”という回答をグラフ化したものが図5である。

(7) 太郎：どうしたの？

次郎：バットが真ん中ラヘンから折れちゃった。

(8) 太郎：花が枯れてる。

次郎：でも、下ラヘンはまだ緑色だよ。

(9) 太郎：あ、ペンの上ラヘンが欠けてる！

次郎：本当だ。

図5をみると、若年層・少年層ともに(7)の「真ん中ラヘン」、(8)の「下ラヘン」、(9)の

「上ラヘン」の順に使用率が高い。先述の通り、(7)を名詞が1つの点として捉えられ、ラヘンがその周辺を示す用法、(8)を名詞が一定の範囲をもち、ラヘンが名詞自体を漠然と示す用法、(9)をそのどちらでもないものとする、図5の使用率の推移は、図4と平行的であるといえる。

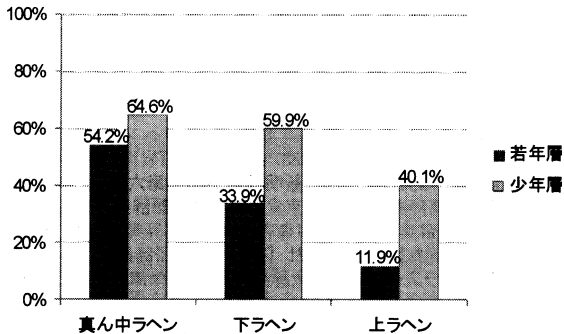


図5 場所の位置を示す相対名詞+ラヘンの使用率

6. まとめ

これまで、福島県郡山市における接尾辞ラヘンの用法とその使用の状況について記述してきた。結論をまとめると以下ようになる。

- ①接尾辞ラヘンの基本形式である指示代名詞+ラヘンは、世代を問わず使用されている。
- ②名詞+ラヘンの形式は、若年層・少年層を中心に使用されていることから、接尾辞ラヘンの新用法であると考えられる。
- ③場所を示す名詞+ラヘンには、i 名詞がある一点と捉えられてラヘンがその周辺を漠然と示す用法、ii 名詞が一定の空間的広がりをもつ範囲と捉えられてラヘンが名詞自体を漠然と示す用法の2つの用法があり、i の用法の方が使用しやすい。

冒頭に掲げた目的は、福島県郡山市における接尾辞ラヘンの使用状況、新しい用法の特徴を把握することであった。その目的を踏まえ、本稿では接尾辞ラヘンの新形式である名詞+ラヘンの存在の指摘と、特に場所を示す名詞+ラヘンの特徴について記述してきた。しかし、これは接尾辞ラヘンの特徴の一部でしかなく、また場所を示す名詞+ラヘンの用法に関しても記述しつくしたとはいえない。今後は、接尾辞ラヘン

の形式面の特徴と意味用法の特徴を全体的に確認した上で、接尾辞ラヘンの意味拡張の変遷について記述していきたい。

なお、聞き取り調査の結果、接尾辞ラヘンの使用は福島県郡山市以外の地域にもみられることがわかってきた。接尾辞ラヘンの各地での使用状況をもとに、その地域差や意味拡張の変遷の地域差に関しても考察することを目指したい。

注

¹ 筆者が調査した辞典類は以下の通りである(出版年順に掲載)。ラヘンの表記がみられた辞典名は太字で表記した。国語辞典:『学研国語大辞典第二版』(1988)学習研究社・『岩波国語辞典第五版』(1994)岩波書店・『日本国語大辞典第二版』(2000~2001)小学館・『新明解国語辞典第六版』(2007)三省堂・『広辞苑第六版』(2008)岩波書店/類語辞典:『類語辞典』(1955)東京堂出版・『類義語辞典』(1972)東京堂出版・『角川類語新辞典』(1981)角川書店・『類語国語辞典』(1985)角川書店・『類語活用辞典』(1989)東京堂出版・『正しい言葉づかいのための似た言葉使い分け辞典』(1991)創拓社・『逆引き同類語辞典』(1993)東京堂出版・『類語大辞典』(2002)講談社・『日本語大シソーラス-類語検索大辞典』(2003)大修館書店・『三省堂類語新辞典』(2005)三省堂

² 文献を調査すると、指示代名詞+ラヘンの用例は明治末期頃から出現し、それ以前には「そこら」のような指示代名詞+ラの用例しかみられない。従って、名詞+ラヘンのみならず指示代名詞+ラヘンも比較的新しい形式であると考えられる。また、『現代日本語方言大辞典』(1992~1993、明治書院)には、指示代名詞+ラヘン(「そこらへん」等)の報告がある地域とない地域とがあり、福島県も指示代名詞+ラ(「そこら」等)のみ報告されている。このことから、福島県郡山市においては指示代名詞+ラが使用されていたところに指示代名詞+ラヘンが使用されるようになり、それをもとに名詞+ラヘンの形式が派生したという変遷をたどることができる可能性がある。

参考文献

- 上野智子(2001)「高知県方言ラ(一)の暗示性と明示性」『日本語科学』9、国立国語研究所、pp. 79 - 100。
 上野智子(2011)『四国方言-とりたて・言いよどみ・言いはなち・言いすてて・言いおさめる-』リール出版。
 木村みゆき(2000)「「へん」の用法について-「あたり」と比較して-」『国文』93、お茶の水女子大学国語国文学会、pp. 64 - 75。
 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店。
 芳賀綏・佐々木瑞枝・門倉正美(1996)『あいまい語辞典』東京堂出版。
 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店。
 毛利正守(1977)「「憶良ら」考-上代の接尾語「ら」を通して-」五味智英・小島憲之他(編)『萬葉集研究6』塙書房、pp. 227 - 261。